

〔論文〕

奄美八月踊りの伝承と信仰 —シマのカミサマをめぐる—

中原ゆかり

NAKAHARA Yukari

はじめに

奄美群島は、鹿児島本土から南に連なる薩南諸島の南部に位置する島嶼群で、有人島は奄美大島、喜界島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島である。琉球語の最北限であり、行政上は鹿児島県大島郡と奄美市にあたる。気候は亜熱帯海洋性で、亜熱帯性照葉樹の森が広がって固有種の生態系が保たれている。2021年には生物多様性が評価されて奄美大島と徳之島が、沖縄本島北部、西表島とともに世界自然遺産として登録された。奄美群島の総人口は、2020年の調査によれば104,281人、さかのぼってみると1985年は153,062人、1955年は205,363人であった。1955年から2020年までで約半数に減少、1985年から2020年では約三分の二に減少していることがわかる¹。

奄美群島には、有史以前から人が住んでいたことを示す遺跡があり、『日本書紀』に阿麻弥人、『続日本紀』には奄美とあって、7世紀末には日本と交流があったことがわかる。8世紀前半には中央との交流は途絶えて酋長割拠時代となり、15世紀半ばには琉球王国に服属した。奄美の行政区画は七間切で構成され、各間切りは二カ方から成り、方の下にいくつもの村があった。琉球王国の支配の基礎はノロ制度による祭政一致政策であり、女性神役ノロが琉球王府からの辞令により任命された。ノロの最頂点は琉球王国の国王の妹である聞得大君であり、各島ごとにオオアムシラレ、オオアンシヤリ、オオアム等というノロがいた。そしてその下に各シマ（集落）のノロがいたのである。『南島雑話』によれば、奄美大島には南部と北部にそ

1. 『奄美群島の現状』第117回奄美群島振興開発審議会資料。

れぞれ一人ずつノロの頭が二名（南部を真須知組、北部を須多組）いたという²。

17世紀に入ると薩摩藩の支配下に入り、琉球王国服属時代の間切のまま、各間切に代官、大親をはじめとした役人が派遣された。サトウキビの栽培が始まり、惣買入制度が明治初期まで続いて島民の暮らしは厳しかった。明治からは鹿児島県へ移行し、大正期からは出稼ぎが激増して日本本土や沖縄の都市部、奄美群島の中心である名瀬に移住する人が増え、出身者の集まりとして郷友会を組織するようになった。第二次世界大戦後はアメリカの占領下となり、1953年に日本復帰している。

このように奄美は、日本本土と沖縄の境界領域に位置し、琉球王国、薩摩藩、日本、米軍の占領、日本復帰という複雑な歴史をあゆんできた。だが、琉球王国支配下で定められたノロは、近年まで生き続けてきたのである。

本稿では、ノロ信仰と関係の深かった八月踊りの伝承について、奄美大島北部の佐仁集落の事例をとりあげて報告する。筆者は1987年から1988年にかけて佐仁に長期滞在し、その後も佐仁へ通い続けて八月踊りの変化、佐仁のシマ（集落）の変化を観察してきた。佐仁のノロは大正時代の中頃に絶えているが、最近になってユタ（シャーマン）の発言権が強くなり、八月踊りの伝承にも関与している。以下本稿では、第1節で奄美の宗教全般とノロ、ユタの信仰との関係について述べ、第2節では八月踊りとノロ信仰の関係について述べる。第3節では、佐仁の八月踊りと聖地、ノロとの関係について述べ、第4節では、近年の佐仁の八月踊りの伝承について、ユタの関与を含めて報告する。第5節では、ユタがシマにおいてカミサマと認められるようになるまでの過程を記す。最後にシマの八月踊りの伝承について、信仰を含めて考察したい。

1. 奄美の宗教

琉球王国服属により導入されて定着したノロ制度により、各シマには親ノロを頂点とした神女組織（親ノロ、ワキノロ、テルコガミ、スズガミ、イガミ等の神女が所属）、および神女組織を手伝う男性（グジヌシ）がいた。ノロは世襲制で継承される司祭であり、ノロ屋敷またはノロ殿内（トノチ）と若干の田畑をもち、村人たちの供物を受けた。ノロがシマにおいておこなう儀礼には、神迎え（ウムケ等）、神送り（ウフリ等）、稲の豊作予祝（アラホバナ等）、収穫祭（フーウンメ等）があった。ノロは、シマの行事にも関与し、航海安全や大漁を祈り、火災や盗難等の際には司法警察的な役割も果たしていたという³。

薩摩藩の支配下では、琉球王国からのノロの辞令授受を禁止した。だが薩摩は

2. 『南島雑話』は、幕末の薩摩藩士であった名越左源太が、奄美大島滞在中に著した民俗誌である。

3. 湧上・山下 1974。

シマの人々の生活を厳しく規制しつつも、取り締まりについては緩やかだったらしい。例えば農業をしない遊日(あそびび)が禁止されたが、『大島私考』によれば実際禁止は実施されていなかった⁴。要するに、薩摩藩の支配下にあってもノロは祭祀をおこない、シマジマの民俗宗教として幕末までは存続したのである。

明治にはいると廃仏毀釈の政策とともに、ノロは厳しく取り締まられたが、奄美大島と加計呂麻島の一部のシマでは継続した。しかし徐々に消えていき、平成の中頃に絶えた。例えば奄美市大熊では、昭和の頃までは盛大に神祭が行われていたが、2003年にノロが他界してグジュシだけになった。2019年には二棟残っていたトネヤ(ノロの祭場もしくは住居)のうちノロの住まいであったサントネが解体され、残る一棟も解体の見込みとある⁵。

ノロは、世襲制で継承されて村落の儀礼を司る、いわば公の存在であった。それに対し、個人的偶発的に発生するシャーマンとしてユタがいる。女性でも男性でもユタになることは可能だが、全体的に女性の方が多い。例えばある人物が身体的・精神的な不調によって長期間苦しみ、いくつもの病院を訪ねつつユタにも相談し、ユタから神の子になるよう(ユタになるように)すすめられる場合がある。あるいは本人が夢の中などで、ユタになるようにというカミの教示を受けることもある。本人と親族とがユタになることを決意すると、既にユタとなっている人(親ユタ、あるいは親カミサマと呼ぶ)の指導による成巫式を経てユタとなり、本人も自らのカミを拝むことで健康を取り戻していく。成巫式が終わったばかりのユタは霊力が強いとされており、新たなユタが誕生したことを知った周囲の人たちは、さっそくト占等の依頼に訪れてユタの能力を試す。ユタによって個人差はあるが、病氣平癒の祈祷、家の地鎮祭や死者の口寄せ等をもおこなうようになり、職業的なユタとなっていく。このようにノロは公の存在であり、ユタは私的な事柄を扱う存在なのである。だがユタが成巫するにはノロが認める必要があったという大熊の例⁶、加計呂麻島薩川においては神役の継承にユタ(薩川ではユキガミ、ホゾンガミ)の指示が先行していた例⁷など、ユタとノロとは相互に関係しあう側面もあった。

薩摩藩の支配以降、奄美にも神社が建っている。為朝伝説や平家伝説に関わる墳墓等を神社としたものや、本土の神社を薩摩藩を通じて分霊勧請した、弁財天一巖島神社、秋葉神社等がある。しかし神社祭祀をノロたちが仕切る所もある等、受容するシマ側に主体性があった。明治になると、1869年からの二年間で奄美全

4. 『大島私考』は、文化二年(1805年)から二年間大島代官をつとめた本田孫九郎親筆による。本田によれば遊日の禁止は安永七年(1778年)であった。

5. 『南海日日新聞』2019.6.11。

6. 高木 1959:63。

7. 柄木田 1983。

域に高千穂神社が二十一社建てられた。戦時体制下には出征祈願等がおこなわれて国家神道化は決定的となったが、米軍統治下では神社離れがおきた。日本復帰運動に際しては名瀬の高千穂神社で断食をするなど、国民意識と神社とが関係していた。復帰後は、都市部の郷友会からの寄付により、神社の建物をコンクリート製に再建した例が多くみられるようになった⁸。

薩摩藩支配下では、派遣された役人のために仏教寺院が創設されるようになった。奄美大島では赤木名に曹洞宗観音寺が創設されたが、役人のいる仮屋が伊津部に移ると観音寺も移動した。他にも喜界島に昌興寺、徳之島には観音堂、弁財天、安住寺、沖永良部島に金毘羅堂が創設されたが、明治の廃仏毀釈により全て廃寺となった。その後浄土真宗本願寺派が、鹿児島出身者の子女を中心に教育に力を入れて名瀬に大正寺を設立、続いて大谷派も布教をはじめ、昭和になると東本願寺を創設した。他にも喜界島には浄心寺、奄美立正教会が創設された。軍港として栄えた奄美大島の古仁屋の商店街は、全戸が本願寺派の鹿児島門徒を占めており、古仁屋説教所のために招かれた僧侶が仏教婦人会を創設した。日本復帰前までに継続していた寺院は四カ寺である⁹。

明治中期になると、カトリックと天理教がはいつてきて多数の信者を獲得し、大正末期には大本が積極的に布教した。しかし昭和になってまもなくすると国家神道の影響で、カトリック、大本の活動は禁止された。天理教は神社と方針を同じくして禁止されなかった。戦後の米軍統治下にあつては、カトリック、大本への統制は解除され、復帰後は創価学会、生長の家、立正佼成会をはじめとした様々な宗教が入っている。創価学会はユタ撲滅運動もおこなったが、ユタは消えることはなく奄美の民俗宗教として生きてきた¹⁰。

現在の奄美では、明治以降入ってきたキリスト教や仏教、天理教、創価学会等々と、シマジマに民俗として根付いている信仰とは、激しく対立するようなことはない。例えば上述した大熊でのサントネの解体工事において、地鎮祭をおこなったのは天理教の司祭であった。また近年は、成巫式をおこなうことなく、真言宗、天理教、生長の家等と関係しながら活動するユタもある¹¹。キリスト教や仏教で葬式をした後、四十九日にはユタにマブリワアシ（死者の霊をおろす儀礼）を依頼することもある。そしてシマの年中行事には、すべての人が参加しているのである。奄美の宗教は、琉球王国や薩摩藩、そして日本本土の影響を受けながらも土着化し、多様性と固有性を醸成してきたと考察できる。

8. 園田 1982。

9. 藤井 1982:174-184。

10. 中牧 1989:85-95。

11. 山下 1983。

2. 八月踊りとノロ信仰

奄美は伝承歌謡や芸能の豊かなところであり、現在盛んにおこなわれているのは、シマウタ（三味線歌）と八月踊りである。どちらもシマで伝承されてきたものだが、ノロ信仰と明らかに関係しているのは、八月踊りである。八月踊りは、太鼓を打ち男女集団で歌を掛け合いながら円を描いて踊る集団舞踊で、奄美大島を中心としたシマジマの旧暦八月のミハチガツ（み八月）の行事で歌い踊られてきた。奄美では正月と八月が一年の大きな節目となっており、ミハチガツとは、アラセツ（旧暦八月の最初の丙丁の両日）、シバサシ（アラセツから七日めにあたる壬癸の両日）、ドンガ（シバサシ後の甲子の日）の三つの祭りをさす。アラセツは火の神の祭り、シバサシは水の神の祭り、ドンガは鼠の害を防ぐための祭りともいわれる。アラセツ前夜のツカリの晩には、前年のアラセツから亡くなった人を家々で祀り、ドンガではかつて改葬（土葬した遺体を洗骨して再び葬ること）がおこなわれていた。ミハチガツは、豊年感謝と祈願、先祖まつり、悪魔払いといった農耕儀礼と祖先祭祀が複雑にからみあう祭りなのである。

八月踊りには、地域やシマにより、踊る機会やレパートリー、音楽的特徴や踊りの振り等に大きな違いがある。例えば奄美大島南部では、ミハチガツよりもむしろ十五夜の行事で盛大に八月踊りを踊るシマの方が多い。踊りのパフォーマンスについても、奄美大島北部では一曲を掛け合いながら次第にテンポを速め、これ以上速いテンポでは歌い踊れないというところで一曲を終えるというアラシャゲのスタイルをとる。これに対して大島南部ではアラシャゲることはなく、最初から最後まで同じテンポでゆったりと歌い踊る。同一曲でもシマによって歌の旋律や踊りの振りが違っており、同じシマの人どうしでなければ共に八月踊りを歌い踊って楽しむことはできない。八月踊りの集団性、シマごとに異なる音楽的、舞踊的特徴は、八月踊りとシマとの結びつきを一層強くしている。

シマの八月踊りとノロ信仰が関係していることは、いくつかの民俗誌から知ることができる。かつて瀬戸内町古志には親ノロ、ノロ、グジヌシがいた。アラセツの前夜には最初にシマ人全員で親ノロ、ノロの家を拝み、その後家々を踊り巡ってグジヌシの家で一旦踊り納めとした。そして翌日には、グジヌシの家から踊り始めて残りのシマの家々をすべて踊り巡ったという¹²。

大熊では、アラセツからシバサシまでの七日間はノロの住宅・祭場である両トネヤ（ウントネ、サントネ）の前の広場で踊っていたが、1996年に区画整理が入りウントネ前の広場の面積が半分になった。それでもノロがいるうちはトネヤ前で踊っていたが、2003年にノロが亡くなった後は、踊りの最初と最後に形式的にトネヤの前に

12. 内田 1983:150。

集まり、踊りそのものはミャー（集落の広場）で踊っている¹³。

龍郷町円には、ナカヤドと呼ばれるノロの屋敷跡があり、八月踊り、相撲等、シマ全体のすべての行事の出発点であった。円のシマで最も盛大な行事は旧暦九月のナミチミシャクで、シマの火事や病気等の災厄を避け、豊作を祈願する祭りである。ナミチミシャクでは、ナカヤドで神人たちが祈願して神酒（米の粉と甘藷を発酵させた酒。祝祭用のもの）を配った後、ナミチと呼ばれるシマの広場でシマの人々が会食し、夜更けまで八月踊りを踊った¹⁴。

このようにシマの八月踊りでは、ノロの屋敷やトネヤを最初に拝むか踊り始めとしていた。ノロが不在となった後も、ノロ屋敷跡等に最初に集まるという方法で聖地を活用している。換言すると、ノロが絶えた現在ではあるが、八月踊りがノロ信仰と関係していたことは、聖地との関係をみていくことで明らかなのである。

3. 佐仁の八月踊りと聖地

佐仁は、奄美大島の最北端、西に東シナ海を望むシマである。大島郡全域のシマウタに多大な影響を与えた南政五郎（1899-1985）をはじめウタシャ（歌者）が多くいたことから、歌や踊りが盛んなシマとされてきた。言語についても、共通語の五つの母音の他に中舌母音が二つあるという奄美方言の特徴にくわえ、佐仁方言には鼻母音が四種類、子音についても k、t、p がそれぞれ二種類あるという著しい特徴がある¹⁵。海の幸、山の幸を利用した独特のシマ料理でも知られ、1980年代までは大島紬が栄えていた。佐仁の人口は、2024年で160世帯234名である。さかのぼってみると1987年は587人、1962年は1,037人であった。つまり1987年から2024年までで半数以下に、1962年から2024年まででは約四分の一に人口減少しており、過疎化が著しくすすんでいる¹⁶。

佐仁のノロは、大正時代の中頃に土地を売って鹿児島へ転出した。以来ノロは絶えたが、ノロの住居跡はカミヤシキ跡としてミハチガツの八月踊りのヤーマワリ（家まわり）のポイントとなっている。図1は、1987年に筆者が長期滞在した折、佐仁の聖地について当時七十代後半から八十代の方たち¹⁷におききして作成したものである。

図1のとおり集落は南北にマエ（一区）とウシロ（二区）に二分され、聖地であるウガミ山、トノチ、ウント、アタジャ、ニャンジョ、アシャゲ、カミヤシキまでは、

13. 押田他 2018:571-576。

14. 山下 1992:335-336。

15. 狩俣 2003。

16. 笠利町調べ。

17. 1890年代後半から1910年頃に生まれた方たち。

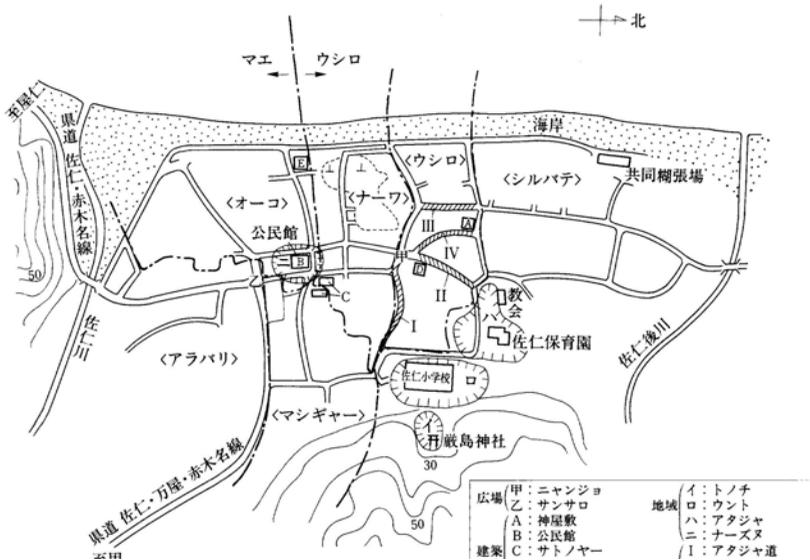


図1 佐仁の民俗地図(1987年の聞き書きにより作成)

全てウシロにあり、サトノヤーはマエとウシロの両方に隣接して二軒ある。奄美の他のシマジマと同様、ウガミ山はカミの降りる山であり、ニヤンジョは中心にある広場として隣接するアシャゲとともに祭場として機能していた。トノチ、ウント、アタジャについても、ノロと関係した祭場や建物等があった。佐仁の伝承では、トノチに殿様が住み、ウントに身分の高い家来が住み、アタジャには身分の低い家来が住んでいた。家来たちはウガミ山の上で、海から敵がせめてこないか見張っていたという。恐らく最上位に位置するトノチに住んでいたのは佐仁の大宗家であり、その下側に位置するウント、アタジャは次位以下の宗家あるいは分家であろう。それよりも後の琉球王国服属時代、より海側の低い位置にノロの屋敷ができ、トノチ、ウント、アタジャを祀るようになったと推測できる。またウシロとマエとの境目に隣接して二軒あるサトノヤー(里の家)は、奄美のシマジマの古い部分をサトと呼ぶことを考えると、古い時代から佐仁にあった家、あるいは何らかの権力のある家だったと推測できる。サトノヤーも、カミヤシキとともに八月踊りのヤーマワリのポイントとなっている。

マエに目をむけると、真ん中を意味するチーヌヌがあり、現在は公民館が建っている。ここには1910年頃(明治の終わり頃)まで七、八棟、1930年頃(昭和のはじめ頃)までは二、三棟の群倉があったという。奄美の群倉は、一般的には火事等

を避けて村はずれに建てることが多い¹⁸。さらにマエのオーコには人里離れたところという意味があり、アラバリは新しく開墾したところという意味である。つまり、佐仁の集落が最初に開けたのは聖地が集中するウシロのあたりであり、その中心がニャンジョであった。そしてその後マエの方へと集落が広がり、広がった集落全体の中心としてマエのナズヌがあると考察できる。

佐仁の八月踊りは、アラセツ二日間、シバサシ二日間の合計四日間かけて、マエとウシロで別々に行い、佐仁のシマに二つの踊りの輪が同時に進みながら、集落内の家々を踊りめぐっていく。1948年から1950年頃までは、アラセツの二日間で集落を一周、シバサシの二日間は逆まわりに集落を一周するという方法をとっていた。つまりウシロの八月踊りでいえば、アラセツではカミヤシキを最初に集落の全戸で踊ってサトノヤーで踊り終わり、シバサシではサトノヤーから踊りはじめてアラセツとは逆まわりに再度全戸を一周してカミヤシキで踊りおさめとなっていた。またマエでは、アラセツはウシロとの境目にある海側の家を最初として全ての家を踊り巡って最後はサトノヤーで終わり、シバサシはサトノヤーで踊りはじめてアラセツと逆順序ですべての家を踊り巡った¹⁹。

このようにアラセツとシバサシでシマを二周して踊り巡る方法は、1948年から1950年頃には四日間かけてシマを一周する方法、つまり従来の半分を踊り巡る方法に改められた。その結果、ウシロを例にとると、カミヤシキから踊りはじめてサトノヤーで終わる年と、サトノヤーで踊りはじめて神屋敷で終わる年とが一年おきにくることになった。当時の年配者たちは「片踊り」といって嫌がったという。この順序は現在まで続いており、四日間踊り終わったシバサシ二日めの夜には、さらにニャンジョ、もしくはナズヌ（公民館）でマエとウシロが合同で何曲が踊っておひらきとなる²⁰。

ウガミ山の麓にあたるトノチには厳島神社があり、薩摩藩支配時代の本土的神社の勧進である²¹。伝承によれば、以前はウガミ山の山頂にあり航海安全の神だったが、何度も船が転覆したため、悪い神だとして海から見えない位置に下ろしたという。戦時中には神社を山頂にうつし、出征兵士のための安全祈願も多かった。戦後はさびれ、1948年に現在の場所にうつった。航海安全の神であるという言い伝えはなくなり、安産の神として安産祈願、御礼にお参りする人もいる。ウガミ山は巨大な聖

18. 村武 1983。

19. マエの踊り始めは、かつては鍛冶屋敷だったが、建物が取り壊されて以降は何度も変更されている。

20. 筆者の観察によれば、最後にニャンジョ、公民館のどちらかでマエ、ウシロの合同で踊ることは、やる年とやらない年がある。双方の踊り納めの時間帯や天気等、その場の雰囲気决定着まっているようである。

21. 園田 1982:364-365。

地であり、神社以外の場所に足を踏み入れることは禁忌で、かつては葬式の棺桶をつくる時にのみ木を伐り出すことができたという。大正の頃までは、ウガミ山に登って雨乞いをしたとも伝わっている。薩摩藩支配時代に神社を建てる場所としてウガミ山が選ばれたのは、もともと佐仁の聖地だったからであろう。恐らくその頃は、神社の祭祀はノロがしきっていたのではないかと推測できる。現在では神社の六月灯の行事の日や²²、旧暦9月9日の神社の祭りの日に²³、神社に集まって八月踊りを踊っている。

また、八月踊りを踊る機会として、公民館での敬老会がある。敬老会では、敬老の日に老人クラブのメンバーたちを敬老者として招待し、公民館前の土俵で相撲や余興をおこなう。中入りとして、公民館前の土俵の周りで八月踊りを踊る。敬老の日におこなわれるようになったのは復帰後に「敬老の日」が普及してからのことで、それ以前は旧暦8月15日に十五夜相撲がおこなわれていた。十五夜相撲の頃は、相撲が終わった夜に八月踊りを踊っていたという。十五夜相撲には、安全祈願等で、かつてノロが関わっていたと推測できる。

ウガミ山、トノチ、ウント、アタジャ、アシャゲ、カミヤシキ、サトノヤー、ニャンジョ、ナーズヌといった聖地について、現在どのくらい伝承されているのかを、筆者が2025年の春に佐仁へ行った折、佐仁の方々に確認してみた²⁴。ウガミ山は佐仁の誰もが知っているが、聖地としては受けとめられていない。八月踊りのヤーマワリのポイントであるカミヤシキは、大部分の人が知っている。サトノヤーの呼称を覚えている人はいないが、八月踊りのヤーマワリのポイントになっていることはある程度知っている。トノチ、ウント、アシャゲについては誰も知らなかった。ニャンジョについては、場所として誰もが知っているが、聖地として記憶している人はいない。アタジャとナーズヌの呼称については七十代後半以上の方²⁵の何人かが場所を示す呼び方として覚えていた。

以上、佐仁の八月踊りと聖地、ノロの関係について考察すると、ミハチガツの八月踊りにノロの関与があったことは明らかであり、神社での旧暦9月9日の祭りや、かつての十五夜相撲（現在は敬老会）でも、ノロの関与があったことが推測できる。

22. 六月灯は旧薩摩藩の神社で新暦六月から七月にかけてそれぞれ日を定めて灯籠を飾る行事で、奄美では名瀬の高千穂神社が盛大である。佐仁では1970年代にはじまった。他の集落でやっているのを見て、当時の青年団が佐仁でも行うようになったという。その後青年団の人数が減ったため、現在では青壮年団が主催している。

23. 年に一度、願掛けをする。戦時中は毎月9日、19日、29日に参拝していたという。

24. 2025年の2月から3月にかけて佐仁へ行く機会があり、3月には佐仁の公民館で「佐仁八月踊りの百年」と題した講演会を行った。そこで確認しながら、佐仁の聖地についての知識を共有することができた。

25. 950年以前の生まれの方たち。

ノロが不在になって百年以上が経過した今、かつての聖地の大部分は忘れられた。ミハチガツの八月踊りのヤーマワリはカミヤシキという聖地を思いおこす機会であり、より新しい聖地として神社と公民館前の土俵があるといえる。

4. 佐仁八月踊りの伝承

奄美のシマジマの人口減少は著しく、佐仁においても過疎化が急激にすすみ、八月踊りの伝承も厳しい状況におかれている。筆者が佐仁に長期滞在した1987年のミハチガツには、アラセツとシバサシの四日間かけて、マエとウシロにわかれて集落内の戸一戸を残らず踊り巡っていた。当時は一戸につき二曲歌い踊り、一曲目と二曲目の間で個々の家がショーケ（踊りの時にふるまう御馳走のこと）をふるまい、あわせて集落への寄付金を出していた²⁶。戸一戸全ての家を踊り巡っていたのは1989年までで、1990年からは家主の希望があれば近隣の二戸以上をひとまとめにして一カ所の踊りとすることができるようになった。そして二戸で一カ所、あるいは三戸で一カ所と、一カ所に対する軒数が年々増えていき、踊りの場の数は少しずつ減少していった。

理由としては、高齢者の独り暮らしが増え、ショーケを作れないケースがでてきたことがある。また、アラセツ、シバサシの八月踊りの日程は、平日になることが多い。アラセツ、シバサシでは、昼の十二時前後から夜中まで歌い踊ってきたが、それは大部分の家が大島紬を生業にしていたため、時間を自由にできたからである²⁷。大島紬がすたれるに従って、昼間は集落の外へ働きに出る人が増え、平日の昼の行事には参加しにくくなってきた。年々開始時間が遅くなり、現在では夕方六時頃から夜九時頃まで踊るようになっている。それでも以前からのマエ、ウシロ別々に二つの踊りの輪があり、カミヤシキやサトノヤーをポイントとしたヤーマワリの順序は守られている。しかしアラセツ、シバサシの四日間の踊りの場の総数は二十カ所強となっ

26. 1970年代中頃までは青年団が主催していた「種下ろし」の行事で集落への寄付金を集めていたが、青年団の人数が減少したため、八月踊りのヤーマワリで婦人会が集めるようになった。種おろしの行事では、手踊りで全戸をめぐるだったが、寄付金を集めなくなったこともあって少しずつすたれていった。1987年のアラセツ前の常会では、手踊り歌の衰退が問題になり、一軒につき八月踊りを二曲に手踊り歌を一曲加え、合計三曲踊るという試みがなされた。しかし曲数が増えたために四日間、昼の十二時から夜中まで歌い踊らなければならず、踊り子たちも体力的に大変であり、歌のリーダーたちは八月踊り後の三、四カ月は声も出ないほどに喉をいためた。翌年は一軒につき八月踊り一曲と二曲目は八月踊りもしくは手踊りのどちらかを家主が選んで、合計二曲とすることになった。数軒分をまとめて一カ所で踊るようになってからは、一カ所で踊る曲数を増やし、現在では一カ所につき四、五曲踊っている。

27. 大島紬は自宅での機織りや集落内での工場での仕事が主体だったため、例えば正月前の11月12月やミハチガツの行事の前には夜遅くまで機織りをしてお金を稼ぎ、正月、8月は機織りをせずに遊ぶといったメリハリのある生活が可能であった。また正月や8月に機織りの音がすることは、好まれなかった。

ており、現在の戸数が約 150 戸あることを考えると、この三十五年間で、踊る場の数、総時間が各段に短くなっていることは確かだ。

こういった人口減少、過疎化をみこんで、八月踊りの伝承のための対策は早くからとられてきた。佐仁の八月踊りには、マスコミの取材や観光施設への出演依頼等があり、1991 年に「国民文化祭ちば」の舞台に出演したことをきっかけに、「佐仁八月踊り保存会」を結成した²⁸。保存会ができたことで、島の内外からの出演依頼が以前より多くなった。主な例をあげると、島内では 2002 年に奄美で開催した全国野鳥のつどい、2005 年の南海文化賞授賞式、2008 年「えらぶの海」映写会、朝崎郁恵コンサートへの出演等々である。島外でも 2004 年の全国民舞指導者講習会(熱海市)で八月踊りを教え、2005 年の愛知万博(愛・地球博)に出演、2017 年には関西奄美会創立百周年記念芸能大会、2018 年には東京奄美会創立百二十周年記念芸能祭等々に出演している。2011 年には、鹿児島県の無形民俗文化財に指定された。奄美のシマジマに八月踊りがある中で、佐仁は特に八月踊りが盛んなところだというお墨付きをもらったのである。

とはいえ佐仁の八月踊りの伝承状況を佐仁の一人一人が実感するのは、8 月のヤマワリである。佐仁の人口減少、高齢化とともに保存会のメンバーも高齢化し、アラセツが近づくたびに「今年の八月踊りは大丈夫か」という声が出ていた。一見すると踊り子の数が多く、伝承の心配はないように見えるが、問題は歌である。八月踊りの歌は、踊りながらの男女集団の歌の掛け合いである。男女ともに歌をうたい出すリーダーがいて、多数の歌詞の知識の中から即座に歌詞を決めて歌う。大抵は一曲につき二十番程度まで掛け合いが続くが、次に何が出てくるのかわからないという歌詞のやりとりの楽しさが重要だ。しかも集団の歌掛けであるため、リーダーが一人で歌うのではなく、他の歌い手たちがわかりやすいように、次に歌う歌詞を伝えながら掛け合わなければならない。そして男性群と女性群の掛け合う音高は、常に女性群が一定の高い音程で掛け合うという音楽的にも大変難しいものである²⁹。さらに一曲の途中からテンポを速めるアラシャゲの技法では、相手の歌が終わらないうちに歌いだして歌をとりあい、男女の旋律が重なりあう部分ができながら、ちょうど心地よいタイミングでアラシャゲていかなければならない。アラシャゲの技法は、リーダー、太鼓打ちを中心に、全体の歌と踊りがうねるようにすすまなければうまくいかない。そしてこういった事柄がすべてうまくいった時に、八月踊りのパフォーマンスに満足することができる。また佐仁八月踊りのレパートリーは全部で二十三曲あ

28. 中原 1997。

29. 女性の音程は、常に男性よりも完全四度高い音程であり、言い換えれば男性の音程は常に女性よりも完全四度低い音程で歌いだし、掛け合っていく。伴奏楽器が太鼓だけということもあり、音程をとるのは高度な技術である。

り³⁰、リーダーとしての技術とレパートリーを身につけるには、何年もかかる。実際リーダーをつとめることができるのは、早くても五十代、大抵は六十代から七十代である。「今年の八月踊りは大丈夫か」という佐仁の人々の言葉には、開催できればよいというのではなく、リーダーをつとめられる人の数は充分なのか、リーダーにつけて歌える人がどのくらいいるのか、以前よりもすたれることなく歌い踊れるのかといった意味合いが含まれている。

過疎化がすすんで空き家が目立ち、佐仁のシマの継続のためにも、八月踊りの伝承のためにも、なんとかしなければという話はあちこちででていた。このまま人口が減っていけば佐仁の歌がなくなってしまうのではないかと話す人もいた。そんな頃、2019年末からの新型コロナウイルス感染症の影響で、翌年3月より人の集まりはすべて禁止となった。そしてその数カ月後の6月、保存会の会長前田和郎氏(1940-2020)が亡くなった。彼は若い頃から八月踊りに夢中になり、リーダーを長年つとめてきた。保存会の立ち上げや助成金の獲得、県の文化財申請、テレビや舞台への出演といった外部との交渉を全て一人でおこない、公民館や小学校での指導者でもあった。かつて経験のないコロナ禍に突入し、強力なリーダーを失ったのである。結局、コロナが五類感染症に引き下げられた2023年春まで、常会も開催できず³¹、集落の行事は原則として全て中止となった³²。

実際のところは、2021年から感染状況をみながら八月踊りの機会だけが少しもうけられた。最初の機会は2021年、旧暦9月9日の神社の祭りでの八月踊りである。二年以上も待った踊りの機会ということもあり、神酒や団子を準備して多数の参加で楽しんだ。次節で詳しく述べるが、老朽化の激しかった佐仁の神社の改修工事が終了して綺麗になったばかりであり、踊り手たちも二重の喜びだったと推測できる。アラセツ、シバサシの八月踊りや敬老会は中止だったが、10月からは佐仁の公民館で八月踊りの練習をするようになった。コロナの感染状況が悪くなると練習はなくなり、回復すると練習があるという方法ではあった。

翌2022年には、前年に引き続き旧暦9月9日の神社の祭りを開催、六月灯の行

30. この他に八月踊りのヤーマワリで移動する時の道歌が一曲、敬老会等で踊りを見せる時に歩きながら輪を作るまでの歌が一曲ある。

31. 常会は、各戸から一人以上出席することが原則となっている集落の会議で、月に一回の割合で開催される。集落全体の行事の細かい計画は、この常会で決める。筆者の観察によると、通常の常会は十名ほどの出席だが、アラセツ前の常会の出席者数は通常より多くなる。コロナ禍の行事等の開催については、マエ(一区)とウシロ(二区)の区長が感染状況をみながら話し合って決めていた。

32. 筆者は、コロナ禍の2020年春からの三年間は、当時勤務していた職場の事情により、居住地である愛媛県の外へ行くことはできなかった。しかし佐仁の何軒かの家とはつねづね電話で頻りに連絡をとっており、リアルタイムで情報を仕入れることはできた。以下、この期間のことについては、電話でのやりとり、および2023年のアラセツに佐仁へ行った時のインタビューをもとに記す。

事も開催して八月踊りを踊った。またアラセツ、シバサシが過ぎてから感染者が少ない時期をみて、一度めはマエのサンサロ(図1参照)で、一週間ほどおいて二度めはウシロのニャンジョで、どちらも場所踊りで夕方から八月踊りがおこなわれた。場所踊りとは、一カ所にとどまって何曲か踊ることである。

感染状況をみながら判断していた区長さんによれば、アラセツ、シバサシのヤマワリや敬老会は、感染しやすいと思われる年配の方々が長時間集まることが予想され、なかなか開催できなかった。神社の祭り、場所踊り、公民館での練習ならば、短い時間ですむため感染の可能性が低い。佐仁の人々の気持ちが慰まるのは八月踊りを歌い踊ることであり、若い世代が継承していくという希望を持つこともできる。コロナ禍の辛い時期をのりきるためにも、こういった機会は必要であった。

さて2023年の春、ようやく平常どおりの生活が戻ってきて、集落の行事も開催できるようになった。そして九月、アラセツ前の常会には、八月踊りの具体的な計画をたてるべく人々が集まった。筆者は、この常会には出席できなかったが、出席者の何人かに電話で様子をおききし、アラセツ、シバサシの佐仁へ行った時に、直接お話を伺った。彼らの話によれば、この時の常会ではヤマワリをやめて場所踊りにしようという意見がでた。奄美大島の他のシマジマをみても、場所踊りにしているところは多い。簡略化することで、仕事が忙しい若い世代の負担を減らすことができる。常会では、場所踊りへの賛成意見がいくつかでて、ほぼ場所踊りに決まりかけた。しかしそこでS氏が発言し、「乙につかって丙にまつる」(きにつかってひにまつる)³³と言われるようにアラセツは火の祭りであり、シバサシは水のカミの祭りである。家々の厄を払い、人間が生きる上で最低限必要な火と水のカミを祀るためにヤマワリが必要だと説明した。彼女の発言は短く落ち着いたものであり、その場にいた人々はすぐに納得してヤマワリをすることがすんなり決まった。S氏は佐仁で唯一のユタである。

実際、八月踊りのレパトリーには「祝唄」と呼ばれる厄払い、幸をもたらすといわれる曲があり、各踊りの場所の最初には必ずこの曲を歌い踊る。ヤマワリでは数軒をまとめて一カ所とはいえ、各家の近くに踊りが来る。しかし場所踊りでは、マエ一カ所、ウシロ一カ所(あるいはマエ、ウシロ合同で一カ所)に踊りの場が固定されるため、大部分の家々には歌声すらも届かず厄払いになるかどうかは疑問が残るというわけである。

佐仁の現在の伝承状況と照らしあわせると、これまでどおりのヤマワリを続けるのか、場所踊りに変更するのかは、意見の分かれるところである。歌として踊りとしての八月踊りの伝承のために多く踊ることが大切なら、ヤマワリが効果的である。

33. 乙の日に迎えて丙の日に踊る、という意味。

ヤーマワリなら四日間で二十数カ所の踊りの場があるが、四日間同じ場所で踊り続ける場所踊りでは踊る曲数も合計時間も減少する。また同じ場所で踊ることには、当然のことながら場所を移動する面白さはない。ヤーマワリでは、細い道で押し合いながら踊ることもあれば、浜に面した場所で夕陽をみながら踊ることもある。また踊りの場には、八十代、九十代の年配の方が来て数曲でも踊ったり、座って見学するのが通例である。年配の方が来ることは、踊り手たちの励みでもある。ヤーマワリで二十数カ所の踊りの場があれば、それぞれの自宅の近くの八月踊りに歩いていける。しかし場所踊りでは、集落内の踊りの場所そのものが固定されるため、踊りの場に行けない年配者の数は多くなることが予想できる。

しかしヤーマワリには、伝承にマイナスの点もある。隣近所で数軒分をまとめて一カ所で踊るヤーマワリでは、ショーケ（踊りのための料理）を作るのが困難な年配者が含まれる。年配の方たちが多い場所では、十軒前後で一カ所となっていてところもあり、場所によっては料理を作ることのできる人が一人、二人のみのこともある。つまり一人ないし二人で十軒分のご馳走を準備しなければならない。仕事をもっている若い世代が大量の料理の準備をすることは相当な労力となる。佐仁では八月踊りのショーケ作りは重要だと考えられており、できあいのものを注文するのは気がひける状況だ。料理に時間がかかりすぎてパフォーマンスに参加する暇がない、あるいは料理が大変過ぎて八月踊りに積極的に参加する気にはなれないということもおきる。場所踊りなら、集落全体で一か所、もしくはマエとウシロと別々に一カ所ずつとなるため、必要な料理の量も減る。料理のできる人が各自一軒分の料理をもっていけば充分となり、過重な負担になることはない。若い世代が八月踊りを嫌いにならないためには、場所踊りがよいとも考えられる。また、この数十年間の過疎化、人口減、八月踊りの衰退を振り返って将来を考えると、ヤーマワリをいつまで続けられるのかは疑問である。早いうちに場所踊りに切り替え、場所踊りをする中でよりよい伝承方法を考えて対策をとっていく方が、前向きだとも考えられる。ヤーマワリよりも短い時間となるが、その分、多くの人が参加するように促すこともできる。

常会ではS氏が発言したことで、急にヤーマワリが決まった。ここから伺えるのは、彼女の発言の影響力の強さである。なぜ彼女の一言で皆が急に納得したのか、筆者は常会に出席した方たちに、様々なたずね方してみた。結局ききだすことができたのは、「彼女は本当のことをいった」という一言であった。つまり彼女の発言の内容に説得されたのである。

5. 佐仁でカミサマになること

繰り返しになるが、S氏の常会での発言に、全員が納得した理由を考えてみよう。常会では、ヤーマワリのための料理の準備が大変だとか歌のリーダーが足りない等、

労力の都合や歌や踊りの技術的なことをあげ、簡略化できる場所踊りの利点をあげていた。これに対してS氏の発言は、八月踊りが佐仁のシマの家々の厄払い、幸をもたらすという、行事本来の意義を思いおこさせるものであった。コロナ感染をずっと警戒して暮らしてきた人々にとって、忘れていた大切なものを思い出したような、ハッとさせられる発言だっただろうと考えられる。しかし、例えば筆者のような研究者がミハチガツの行事の意義を述べたところで、迷信だと一蹴されるかもしれない、常会の出席者の気持ちが動くとは思えない。彼女の発言には、周囲の人に受け入れられる「何か」があった。

筆者が1987年に佐仁に長期滞在していた頃から、彼女は佐仁唯一のユタであり、既に他島や本土からも依頼者が訪れるほどの人気であった。彼女の家に行くと、朝早くから夜遅くまで何人も依頼者が訪れていた。しかし佐仁においては大部分の人が、「シマにいればお互いに何でも知っている。ト占にいてもしょうがない」という。実際ユタへの信頼は、「初めて会ったのに、自分のことや家族、先祖のことをピタリと当てた」という驚きからはじまり、何度も通うようになることが多い。だが、同じ佐仁に生まれ育っていれば、互いのこと、家族、先祖のことはよく知っているのが当然だ。ト占を依頼する意味もなく、霊力をためすこともできない。ユタになったことを特別視することもなく、シマ人としてごく普通のつきあいを続けているようにみえた。

しかし、その後十年、二十年、と筆者が佐仁へ通ううちに、佐仁の人々の彼女に対する評価は少しずつ変わってきた。以前のように、ユタS氏をたずねる依頼者が全国からやってきていることには変わりなかった。彼女をユタ以上の存在として認めている人がいると筆者が感じたのは、2019年、佐仁のわらべ歌の本を出版し、佐仁の全戸に配付・贈呈するという個人的なプロジェクトを実施した時である。戸数分の本を持って佐仁へ行き、明日から配付をはじめようと準備していると、数名の方から「S氏のところへ一番先に持っていけよ。カミサマだから」とアドバイスを受けたのである。アドバイスをした数名は、S氏とは特別に個人的なつきあいはなく、ユタや占い等を信じているようなタイプの人たちでもなかった。伝承によれば、かつて奄美のシマジマにノロがいた時代には、大漁の時には最初にノロの所へ魚をもっていき、稲の収穫にあたって初穂をノロの所へ持っていった。そして佐仁には、歌や踊りは佐仁のシマの先祖が残してくれた宝だという言い伝えがある。佐仁のわらべ歌を扱った本は、佐仁のカミサマに最初に差し上げるべきだという意味だと、筆者は解釈した。カミサマというのは、シマの人々がユタやノロを呼ぶ時の言い方であり、ここで彼らがS氏をカミサマだからと言ったのは、明らかにかつてのノロのような、シマのカミサマだという意味合いがあった。筆者がS氏を含めた佐仁の人たちとつきあうようになってから、約三十年後のことである。

ではなぜ、S氏をシマのカミサマと認める人がいるのだろうか。彼女の成巫過程をみてみよう。彼女のところには、研究者や学生、エッセイスト等も多く訪れ、彼女のことは書籍や論文に多数記されている³⁴。短くまとめると以下のとおりである。

1941年、佐仁に生まれる。二十四歳で結婚したが、神の声がきこえてきてユタになるようすすめられた。だが子供が成長するまで待つてほしいと思い、延期願い（ユタとなるまでの期間を延期すること）を出した。その後夫が重病となり、彼女が二十八歳の時に亡くなった。以来、生活上の苦労を重ねることになる。三十一歳の頃に自身が動けないほどの病気となり、医者にいても治らず、ある宗教をすすめられて行ってみても効きめは全くなかった。結局は親ユタを頼んで神の子になる（ユタになる）ことになった。成巫式ではテンザシシの神（天照大神）が降り、神の子として認められた。すぐに多数の人が卜占の依頼に訪れるようになって、自身の体調も回復した。しかし一年後に再び高熱を出し、ノロ神が降りてきた。かつてノロ神が住んでいたというマエの屋敷へ行き、その家に住む人から盃をもらおうと身体は治った³⁵。以来S氏の神棚にはテンザシシの神とノロ神の両方が祀られている。ノロ神は神々のなかでも最高位にあり、テンザシシの神とノロ神を祀ることで、あらゆる神をおろすことができるという。数年後、かつてのノロ神の孫にあたる人が埼玉県与野市にいたことがわかり、ノロの遺品を譲り受けに行った。ノロ神の孫とS氏の父とは、フタイトコにあたるという。遺品は盃であり、S氏はその盃を神棚に置き、依頼の内容によっては神酒を注いで使用している。

以上がS氏の成巫過程の概要である。テンザシシの神とノロ神を拝み、かつてマエにいたというノロ神の孫をたずねて遺品を譲り受けている。

筆者が最初に佐仁に長期滞在した1987年、逆算すると、彼女は四十代半ばで、ユタとなってから十五年たったことになる。佐仁の人たちがユタS氏のところへ卜占等に行かないのは上述したとおりだが、親族が亡くなった後、亡き人の四十九日に霊をおろすマブリワアシについては、S氏に依頼したという話を何度かきいている。佐仁の中ではお互いに何でも知っているとはいえ、亡くなった人の心の中までは誰にもわからない。またマブリワアシができるのは、特に霊力の強いほんのひとにぎりのユタのみである。彼女がマブリワアシができるほどの強い霊力をもつユタであ

34. ライフヒストリーについては、落合 2012、西村 2017などがある。

35. S氏のいうノロ神の屋敷とは、琉球王朝時代からの継承によるノロとは全く別である。ノロ神が亡くなった後は別の血筋の人が住んでいる。

ることを、少なくとも佐仁の何人かは既に認めていたことになる³⁶。

筆者は、佐仁に長期滞在して以来、佐仁へ行く機会があるごとに、なんとなくS氏の家をたずねてきた。というのは、シマの中には人の集まりやすい家があるところがあり、そういう家には筆者も上がりやすい。S氏の家もそういった家であり、気楽にたずねて、仕事の邪魔をしないように気づかいながら、世間話をしたりお茶やお料理を御馳走になったりしてきた。何げない話をするだけではあるが、なぜ彼女は人の気持ちがあんなにわかるのか、心に響く言葉をサッと返せるのかと驚くことが多々あった。それを彼女の人格として評価することもできるが、人の心が手にとるようにわかるというユタの力だと評価することもできる。ごく普通に彼女とつきあう佐仁の人々の中にも、恐らくそういった感触をもつ人はいると思う。

佐仁の人としてのS氏は、集落の活動に積極的で、婦人会長をつとめたこともある。八月踊り等の行事にも参加し、毎年太鼓を打ってきた。いわゆる伝統的な民俗的風習もよく知って実践している。例えばシバサシの前日の夕方、家の門の片側に枯草やわら束にニンク等をいれて燃やすと、火事を防ぐことができるといわれている。筆者の知る限り、現在この風習を実行しているのは、集落全体でS氏一人である³⁷。

また、S氏がユタになってから今日まで、佐仁のシマ全体のために祈っていることがある。神社での六月灯の時の祈願、旧暦9月9日の神社の祭りの時の祈願、そして敬老会の相撲の前の祈願である。六月灯の日の早朝、旧暦9月9日の祭りの日の早朝には、一人神社へ行って佐仁のシマの平穏と繁栄、佐仁の人々の健康と幸せを祈願する。そして神社に集まる人たちに、神酒をつくってふるまってきた。敬老会の相撲では、力士たちが早朝から神社へ参拝して、海で禊をしてから土俵へ行く。S氏は当日の朝、力士たちが来る前に塩と米、神酒を持って土俵へ行き、女性は土俵に上がれないため土俵の外側から四隅に塩と米を置いて、怪我がないようにと祈願する。これら神社での祈願や相撲前の祈願は、大正の中頃までは佐仁にいたというノロの役目であったことだろう。また神社についてS氏は、「佐仁に最初にカミが降りてきた所」として日ごろから大切に考えており、夫と二人で老朽化の激しい神社の掃除をしたり、壊れかけた箇所を修理したりしてきた。

S氏のこういった活動は自主的なものであり、なおかつ数十年にわたって続けていることを、佐仁の人々は知っている。特に神社や土俵での祈願については、カミと通じている彼女でなければできないことでもある。そしてこの十年たらずの間には、常会等の集まりでの彼女の発言に、周囲の人たちが納得することが多くなった。そ

36. 山下 1986。

37. 筆者が1987年に佐仁に滞在した時、シバサシ前日の家々をまわり、この慣習を実行している家を探した。当時確認できたのは佐仁ではS氏を含めた2軒だけであった。S氏をのぞいた1軒では現在では代替わりにより継承していない。

して彼女を長く知る佐仁の年配の人たちの中には、「S氏はカミサマになった」と表現する人がでてきたのである。しかし彼らは、S氏がカミサマだから従わなければならないとは考えていない。S氏の発言も、常に佐仁の人としての意見の一つとしてきく。そして時折彼女の発言内容にハッと驚き共感した時に、やはりカミサマなのだと感じるのである。そのような状況の一つとして、第4節で述べた2023年のアラセツ前の常会における彼女の発言と、八月踊りのヤマワリの決定があったのである。

コロナ禍の2021年、佐仁の巖島神社の大がかりな改修が行われた。これは、ユタS氏のところに通ってきていた山梨県からのメンバー八人の申し出で、奄美の地元企業も協力しておこなったものである³⁸。神社の老朽化は佐仁の皆が気にしていても、集落には財力がない。またS氏が夫とともにできる範囲での掃除や修理をおこなっていたものの、多額の費用がかかる改修までは思いつかなかったという。改修され新しくなった神社で、コロナ禍ではじめての八月踊りが行われたことは、第4節で述べたとおりである。

八月踊りのヤマワリの時には、浜に面したS氏の家の前に大きな踊りの輪ができる。「ここはカミサマだから、とても多くの人踊りに来る」という人も多い。八月踊りへの参加は一人一人の自主性にまかされたものであり、人の多い理由としては、親戚が多く来るとか、ショーケが豪華だとか、踊りやすい場所にある等、他の要素をあげることもできるはずだ。にもかかわらず、カミサマの家だから多数の踊り手がいると感じる人が多いのである。

おわりに

本稿では、奄美のシマで歌い踊られている八月踊りの伝承とノロ、ユタを中心とした信仰との関連について、奄美大島北部の佐仁集落の事例をとりあげて報告してきた。琉球王朝支配下からのノロ、ユタは、神社や仏教、キリスト教等といった宗教が奄美へ入ってきて、それぞれに折り合いをつけ、民俗宗教として生き延びてきた。ノロに関しては厳しい弾圧や世襲制による継承の難しさにより消えていったが、個人的、偶発的に発生するユタは絶えることはなかった。

本稿で報告した佐仁においては、大正の中頃にノロが絶えている。しかしそれから約五十年後に成巫したS氏は、いわゆるユタの行うト占等の他に、神社の祭りでの祈願や十五夜相撲の安全祈願をおこなうなど、かつてのノロの役目の一部になってきた。そしてS氏は佐仁の巖島神社を、「佐仁に最初にカミが降りてきたところ」として大切にしている。かつて佐仁にはカミの降りる聖地としてウガミ山があり、その場所に巖島神社が建てられた。佐仁の巖島神社は、神社であると同時に、佐

38. 『奄美新聞』2021.10.5。『南海日日新聞』2021.10.16。

仁のシマに最初にカミが降りてきたところと解釈されて、現在に生きる佐仁の聖地となっているのである。

佐仁で生まれ育ちユタとなったS氏は、今では常会での発言権が強く、結果として八月踊りの伝承にも関与している。重要なのは、佐仁の人たちの中に、自らの目で見てS氏をシマのカミサマとして認めるようになった人がいることである。S氏が全国的に依頼者をもつほどの人気ユタになってから、数十年後のことであった。奄美には、ユタの提案によって、ノロが執り行っていた祭祀が復活した事例もある³⁹。ノロが絶えていてもユタがかつてのノロの役割の一部をになっているような例は、他のシマにもあるのではないかと推測している。

シマの八月踊りの伝承には、様々な側面がある。太鼓の打ち方や歌の掛け合い方、踊り方といったパフォーマンスとしての八月踊りを伝えることは、誰もが重要なものと考えられるだろう。娯楽といえば八月踊りしかなかったような時代は終わり、シマジマでは、歌詞集や録音資料を作成して、伝承のための練習がおこなわれている。

パフォーマンスとしての八月踊りを伝えるためには、シマにおける伝承の場が継続することが重要である。佐仁においてはアラセツ、シバサシのヤーマワリが伝承の中心であり、時代の変化とともに検討され、変化しながら継続してきた。神社の祭りや敬老会、日常的な練習の場も含め、いくつもの伝承の場があることが、それぞれの楽しさを伝え、時には歌と踊りの厳しさを伝えるところとなっている。

そして行事としての八月踊りの意味も、変化しながら伝承されてきた。かつてミハチガツの行事では、枯草やニンニクを門の前で焼き、墓を掘り起こしての洗骨・改葬がおこなわれていた。こういった風習がほぼなくなった今、ミハチガツの八月踊りにはカミがいなくなってしまったかのように見える。だがコロナ禍が終わり、アラセツ前の常会で、アラセツが火の祭りであると説明したS氏の発言を「本当のこと」と感じた人たちがいた。コロナ禍を経験し、過疎化に悩む今、シマ人たち自身が八月踊りに厄払いや幸をもたらす意義があってほしいと感じているのではないだろうか。そしてその八月踊りの意義も、シマ人たちの生活の変化、生活感情とともに、様々な解釈にかわっている。

シマ人ひとりひとりが、それぞれの願いや祈りを口にすることは少ない。八月踊りを歌い踊ることが、幸を招きたいという彼らの気持ちの表現であり、シマの継続を願う祈りのひとつであるといえる。

39. 大越 1983。

謝辞

本研究に関する調査の一部は、JSPS 科研費基盤研究 (C)22K00144「太鼓音楽の伝承と創造に関する動態的研究」の助成によるものです。また本稿は、第 17 回南山宗教研究会での研究発表「奄美八月踊りの近代—シマの歌、踊り、信仰—」、および奄美市佐仁における公開講演会「佐仁八月踊りの百年」をもとに執筆しました。発表の機会をくださった方々、発表に足を運んでくださった皆様にお礼を申し上げるとともに、四十年近くおつきあいくださっている佐仁集落の皆様感謝の気持ちを捧げます。

参考文献

内田 るり子

1983『奄美民謡とその周辺』有山閣。

大越 公平

1983「奄美・加計呂麻島におけるトネヤ祝いとその祭祀集団」、上野和男・大越公平編『現代のエスプリ：奄美の神と村』至文堂、197-213。

小川 学夫

1979『奄美民謡誌』法政大学出版局。

1989『歌の民俗』雄山閣。

押田 佳子・松尾 あずさ・浦出 俊和・上田 萌子・大平 和弘・上甫 木昭春

2018「奄美大島におけるノロ祭祀空間の継承状況に関する研究」、『ランドスケープ研究』81(5)、571-576。

落合 貴美子

2012『奄美シャーマンのライフストーリー』南方新社。

笠利町誌執筆委員会編

1973『笠利町誌』鹿児島県大島郡笠利町発行。

柄木田 康之

1983「ノロ祭祀集団に対する民間巫者の関与：奄美加計呂麻島薩川の予備的報告」、北見俊夫編『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリヤー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』昭和 57 年度文部省科学研究費補助金（総合 A）研究成果報告書、35-46。

狩俣 繁久

2003『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』大阪学院大学情報学部。

文 英吉

1933『奄美大島民謡大観』私家版。

茂野 幽考

1927『奄美大島民族誌』岡書院。

住谷 一彦・クライナー、ヨーゼフ

1977『南西諸島の神観念』未来社。

園田 稔

1978「神社成立の奄美的類型」、『人類科学』30、113-139。

1982「神社創建にみる奄美の特性」、九学会連合奄美調査委員会編『奄美：自然・文化・社会』、弘文堂、352-368。

高木 宏夫

1959「奄美・宗教」、『日本民俗学大系』12、平凡社、51-66。

龍田民俗学会

1984『佐仁の民俗』龍田民俗学会発行。

中原 ゆかり

1997『奄美の「シマの歌」』弘文堂。

2018『奄美の花ジマ 佐仁のわらべ歌』浅野太鼓文化研究所。

中牧 弘允

1989『日本宗教と日系宗教の研究：日本・アメリカ・ブラジル』刀水書房。

仲松 弥秀

1975『神と村』伝統と現代社。

名越 左源太

1850-1855 (推定成立年代)『南島雑話』。

西村 仁美

2017『「ユタ」の黄金言葉(くがに・くうとぅば)：沖縄・奄美のシャーマンがおろす神の声』東邦出版。

昇 曙夢

1949『大奄美史』原書房。

日本放送協会編

1993『日本民謡大観(沖縄・奄美) 奄美諸島篇』日本放送出版協会。

藤井 正雄

1982「仏教の展開とその受容形態」、九学会連合奄美調査委員会編『奄美：自然・文化・社会』、174-184。

外間 守善

1972『日本庶民生活史料集成 19 南島古謡』三一書房。

本田孫九郎親孚

1972『奄美史料 2 大島私考』鹿児島県立図書館奄美分館。

松原 武実編

1991『奄美大島佐仁の八月踊り歌詞集』南日本文化研究所研究叢書 16。

村武 精一

1983「奄美村落の社会的・象徴的秩序の再構成」、上野和男・大越公平編『現代のエスプリ：奄美の神と村』至文堂、149-161。

八木橋 伸浩

2021「奄美におけるユタの成巫過程に関する覚書」、玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要 (14)、37-50。

山下 欣一

1977『奄美のシャーマニズム』弘文堂。

1982「奄美のユタの成巫過程の検討：二、三の事例を通じて」、九学会連合奄美調査委員会編『奄美：自然・文化・社会』弘文堂。

1983「奄美のユタの社会的機能：その変容の事例— client の視点から—」、北見俊夫編『南西諸島における民間巫者（ユタ・カンカカリヤー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』昭和 57 年度文部省科学研究費補助金（総合 A）研究成果報告書、1-10。

1986「奄美のユタのクチ（呪詞）：「ことば」と「うた」の関連を中心に」、川田順造・山本吉左右編『口頭伝承の比較研究』3、弘文堂、59-85。

1992「奄美のシマと神女：ノロとユタを中心に」、谷川健一編著『琉球弧の世界』小学館、327-362。

湧上 元雄・山下 欣一

1974『沖縄・奄美の民間信仰』明玄書房。

参考 URL

『奄美群島の現状』第 117 回奄美群島振興開発審議会資料

<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001612371.pdf>

（最終閲覧日：2025 年 7 月 10 日）

鹿児島県神社庁

<https://www.kagojinjacho.or.jp/> （最終閲覧日：2025 年 7 月 10 日）

世界遺産 (文化庁)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/index.html (最終閲覧日: 2025年7月10日)

音響資料

鹿児島短期大学附属南日本文化研究所

『奄美大島佐仁の八月踊り』CD2枚組、ワーナーパイオニア、WQCL-6、WQCL-7。

なかはら・ゆかり
(南山宗教文化研究所)